

3 学期終業式講話

コロナウイルスとの闘いに終始した令和2年度が、本日で終了となります。皆さんにとってかけがえのない高校生活の1年が、このような年になってしまったことは、とても切ない思いでいっぱいですが、全世界の全人類にとって「今年」という時間は同じ状況であったとすれば、そんな状況の中でも、どのように過ごすことができたか。今日は、そんなこの1年を、「充実した1年であったか」を振り返る日でもあります。災害の渦中であって、今まで目を閉ざしてきたものや、見えなかったものが見えた1年でもありました。見えたものは、コロナウイルスよりも怖いものは「人間であった」ということです。自粛警察という言葉も生まれました。人の行動が気になるようになったことは、皆さんも感じたことではないでしょうか。醜いのは、人の行動を自分の狭い尺度で測り、自分が正しいという誤った正義感から、ネットで誹謗中傷したりする。どれほど醜い行為か、悲しくなることも多くありました。

最近私は、世界から見える日本の姿についての本を何冊か興味深く読みました。特に面白かったのは、「世界のニュースを日本人は何も知らない」という、世界各国で就労経験のある元国連職員の本谷真由美さんの本です。図書館にありますのでぜひ一読してみてください。海外の視点からすると、あらためて、日本は安全で住みやすい国であることも認識し、だからこそもっと心豊かに生きたいと感じさせられます。しかし残念なことは、日本という国は、とても狭い価値観で孤立し、コロナウイルスに関しても、感染した方や医療従事者の方に対しての誹謗中傷が生まれる国になってしまい、こんな国民性は他にはないのではと思わされる悲しい現実もあります。

また、京都精華大学学長に就任した、アフリカ出身のウスビ・サコさんの著書には、日本は「均一にならなければダメ」という社会の空気が、さまざまに個人を追い込んでいる。パターン化されているものに当てはまらないことを、「悪い」と捉える価値観が正当化されていると表現していました。日本の美しい景観や、礼儀正しさなどの誇れるものは、もしかするとこういった文化が育んだものかもしれません。しかし海外の方からするととても異質に映るようで、追い込まれて自殺者を生み出している数値的な多さも、狭い価値観が生んだ悪い構図の表れであります。

コロナが無かったとしても「これから」と言われる時代に必要なことは、将来どんな職業に就くにしても、多様な人と多様な価値観とともに生きていくことになるということです。友達とうまくいかないという悩みにも通じることですね。同じ属性の人ばかりで社会を創って行ける時代ではないということ。人と違ったことを恐れる、いわゆる「多数派」として生きてきた人たちが、多様な人間を理解し、一緒に生きていかなければならないということです。これを、残酷と捉えるかチャンスと捉えるか。自分次第といったところでしょうか。次年度は、ぜひこのことを心に留め、皆さんが選ぶ進路先は、皆さんにとって、この時代を生きていかれる学びを提供してくれる場所なのかを見極めてから、進路先を選択して欲しいと願います。

もう一度言います。同じ属性の人ばかりで、社会を創って行ける時代ではありません。多様な考えの中であって、自分はどう生きるかを、高校時代にもぜひ考え行動して欲しいのです。人と違うだけで差別や偏見は絶対だめ。人と違う自分を諦めることもだめ。多様性を認め、その社会の中で自分はどう係われるか、その人間力を試される時代なのです。

今日はぜひ、今年度の振り返りをして、令和3年度は、さらに、多様な人たちと心通わせ、成長が遂げられる1年にしてほしいと、願っています。